

趣味家の交点

— 『蒐印帖』・『盟志はりこみ帖』から木村捨三・川西英・大野麦風に至る

牧野 和夫

はじめに

伊勢半本店紅ミュージアムで開催された企画展『伊東深水が見た像』（平成27年10・10～11・29）の、会場入り口脇にさりげなく懐紙とおぼしき一片の和紙が置かれていた。自作の小唄を深水自ら墨で認めたものであった。

「伊東深水と小唄、そして昭和10年代の集古会」（『日本古書通信』996号 2012・7）に紹介した深水自筆の小唄などの断片類と同じ手のもので、2011年に入手した品々は伊東深水↓伊東万耀↓万耀夫人みどりというゆかりの人々の手に受け継がれてきた末のもの、と改めて確認されたのである。

ここに仙秀木村捨三の昭和九年頃の一行の「寄せ書き」、「塵芥」とも称すべき一資料を報告する。趣味家のなにげない行き交いの「痕跡」である一帖の「蒐印帖」を紹介することから先ずは始めたい。紅ミュージアムに足を運んだついでに、集古会の木村捨三（集古会のキーさん

か）の傍らに昭和10年前後の伊東深水を置いてみた三年前の試みを想起したからである。

一、一帖の「蒐印帖」―「飛入 木村捨三」

昭和10年頃のスタンプ熱について「よく水に見まはれる／あしやの里」の食満南北が昭和十年九月刊『すたんぷ柳多留』（番傘川柳社）の序文に「今の世の中に、とてもはやるものは多くあるが大抵寿命が短い。ところがスタンプはどういふわけか、／いろ／＼に変遷はして行くが中々命が永い。其處で／川柳趣味の展覧会の記念として、勿驚参加するもの／が七十に近いといふので、其隆盛さも、思ひ合はさ／れる。何にしても柳画を配したスタンプ、さうして／川柳が這入つてゐると云つたのは、とても珍らしい／と思ふ。大に流行して下さい。」と記している。第二回川柳趣味展覧会（於大阪三越）の記念小冊子である。

スタンプについての参考資料は、野島寿三郎氏編『ペーパーコレク

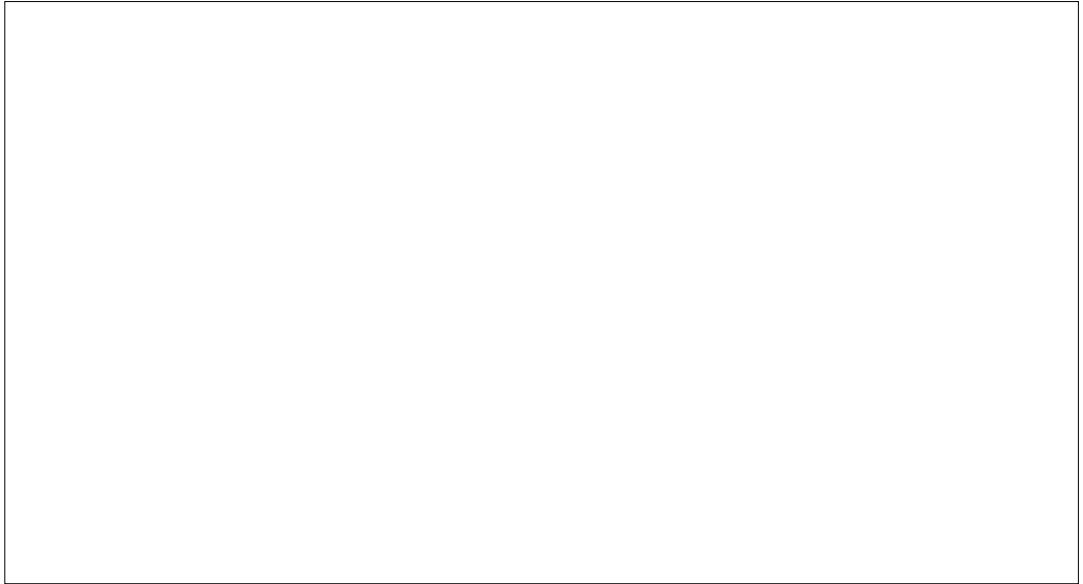


図1

シヨン入門』(2003 日外アソシエーツ)、岸文和氏「スタンプ狂の時代―昭和10年の蒐集熱と観光旅行」(『文化遺産としての大衆的イメージ―近代日本における視覚文化の美学美術史的研究』研究成果報告書)を挙げておく。

昭和11〜12年にかけて捺印された、関西のスタンプ熱を伝える「蒐印帖」に「木村捨三」の署名(図2)を見出したのは、旧蔵者の野島寿三郎氏であった。この蒐印帖は「いもぼう 季節会席料理 藤の棚 平野屋」の隣票・スタンプに始まり、「鳥居本 京祇園 花見小路」の隣票に終わるもので、途中、大阪に立ち寄ったらしいスタンプがあるが、すぐに京都へ戻ったようで、「宇治川花屋敷」が続く。表・裏十一折すべてに隣票実物貼り付け・スタンプ捺印を施したものである。縦11.7×8.8cmの淡黒布貼りポウル紙装折本仕立ての標準的な蒐印帖である。参考までにほぼ同じ頃のほぼ同寸法の蒐印帖を示す。写真図1右は昭和11年5月17日「金州駅」のスタンプに始まり、5月21日「奉天駅」経由で末が欠けていて5月24日迄でいずれにも紫煙票が貼られるもの、図1中は「箱根神社」スタンプに始まり、昭和12年(?)「伊東 佛現寺」に終わるもの、図1左が「飛入 木村捨三」の蒐印帖である。

この8折右に京都の七条「大佛 わらじや」のスタンプ2顆の左下に「飛入 木村捨三」と墨署名がある(図2)。京七条の「わらじや」で催された、ある集まりに木村仙秀が「飛入」参加した、というのである。京都大佛わらじやと木村捨三の取り合わせから想起される一文、仙秀が暁杜小山源治翁を追悼した文章である。『集古』(昭和18年第貳號)に収められたものである。

「暁杜翁を憶ふ

木村捨三

五六年前の春の頃、京都へ行ったとき、是非小山さんのお住居をお尋ねしたいと、田中緑紅さんに打合を頼んでおいた。……その翌朝早くに、私の泊てゐる大文字屋へ、ひよっこり見へられ、どこか案内をしようとのことであつた。……晩には月曜會でまた會はうといつて、烏丸の通りでお別れした。その夜、大佛のわらじ屋で、久し振りの月曜會といふので田中さんに案内された。蛭川、藤堂、山鹿、禿氏、日向、猪飼など、京都の諸大家が参集してゐたが、ここでも小山さんの長老ぶりが見られ、集古會の人でこの會に出席したのは林さんと君だけだ、何か記念を林さんに上げようと、嘯谷画伯が色紙に水墨で草鞋をかき、それへ出席諸氏に署名して貰つてゐる所へ、御霊の出雲寺さんが、いま大阪から帰つて駆附けたと、大汗かいてはいつて来られた。話はそれからそれと汲めども尽きぬ有様だつた。食膳が出ると、小山さんは私にこれが例の揚麩ですよと教へられた。それは五人女の輪講の記事を思ひ出されたので、列席の諸氏も上方のことは上方で……」

簡単にこの会合に出席した二人について記せば、暁杜翁…小山源治（集古会々員、京都集古会設立者、月曜会・有楽会ほか会員）、嘯谷画伯…猪飼嘯谷（月曜会々員、谷口香嶠に学ぶ。京都絵専教授）である。また、「五人女の輪講」とあるのは、林若樹・三田村鳶魚・木村仙秀ほか参加の『西鶴輪講好色五人女…附半二輪講新版歌祭文』（朝日書房、1930）を指してのことであらう。

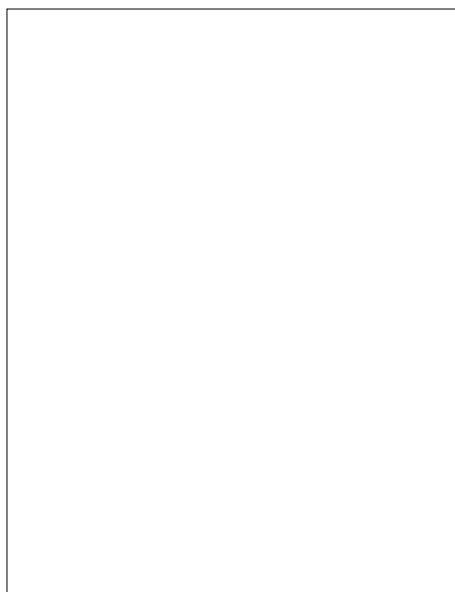


図2

昭和18年の五六年前の春の頃というところ、昭和12、13年頃にあたる。まさに、このスタンプ蒐印帖を懐にした月曜会会員のひとり（と考えるのが妥当だが、確言できない）が洛内外の割烹・茶屋・カフェなどを巡歴していた頃である。スタンプによれば交詢社地下酒場に現れたのは十一年の十月二十一日で、その暫く後に「わらじや」のスタンプがあり、祇園中村楼に現れたのが十二年四月十七日である。「わらじや」のスタンプが捺された頃は、丁度昭和十二年の春の頃となる。

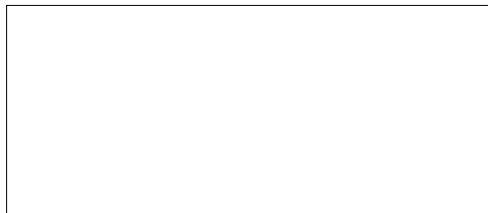


図3

昭和十年の月曜会の会員については、既に『実践国文学』87号に掲載したが再度掲載しておく(図3)。

ちなみにこの月曜会や大阪の保古会の人々は明治36、37年頃から集古会に陸続として入会し、大正期には大方の主要メンバーが集古会の会員となっていた。小山源治・杉浦丘園・田中緑紅・禿氏祐祥などである。参考までに左に掲げるのは昭和十年刊行の『千里相識』の「地方会員」「小山源治」の項である。

「一 神戸にて誕生、大坂にて育、廿二歳移京／二 京都上京区河原町広小路下ル／三 無職／四 汎江浅流／五 何でもや／六 暁杜」「明治八年四月十日生」

この蒐印帖のもつ意味は深い。スタンプ熱の冷めやらぬ昭和十年代初期に月曜会々員など京都在住の趣味家が立ち寄った洛中・洛外の店々にはスタンプが用意され客もまた好んで捺すのを常としたことである。さらに立ち寄り先の店名を具体的に一覧できる点にある。

とくに興味深いものは、高級カフェ・サロンのスタンプと女給のサインの取り合わせである。京都のアラスカや交詢社、四條寺町のサロン菊、金岩楼のスタンプ・燐票が所狭しと捺され貼られる中にサインが散見される。

こうしたサロンのスタンプ・燐票を女給のサインと取り合わせて手許に残す風は、意外に趣味家とも縁があったようで、実見したものは、やはり集古会々員の井上和雄の昭和十年代のものがある。その折の控えメモを見ると、貼られた燐票から判明するのは東京新橋際の銀座パレスや同じく銀座のサロン春、昭和通りエビスビヤホール横のユングフラウ、神田ティールーム・サンゴ、京都では河原町サロン高橋な

どで、今後も探せばでてくるのではないか。井上の貼り交ぜ帖披見メモに抛れば、浮世絵同好会の発会式が京橋区日吉町の鳥料理屋「壽々女」で開催された、ということのわかる名刺も貼られていた。ついでに若干撮影を許された内から数点を掲げる。上はその名刺、ペン字は井上(図4)。下は井上宛、大矢竹雄の賀状(図5)。



図4

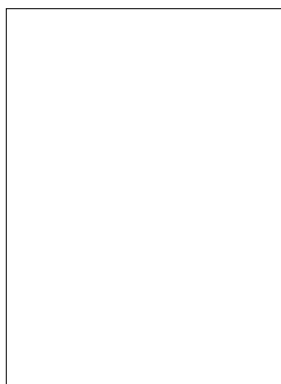


図5

昭和の大恐慌後のことではあるが、大大阪や復興大東京の賑やかなカフェ・サロン文化の及ぶところ趣味家もまた例外ではなかったのである。京都の燐票は手許にないが、昭和七、八年頃の東京の燐票は出てきたので、二三参考までに掲載する。昭和七年の銀座サロン春と神田喫茶舗サンゴである。ちなみにこれらの燐票が貼り込まれたノートブック二冊は大手の出版編集者の手から出た、という古書店主の話(燐票は、確かにほとんどが神田・銀座界隈のもの)である。上はサロン春、オリンピック・ロスアンジェルス大会燐票(図6)、下は神田サンゴ燐票、芋版かゴム版か(図7)。

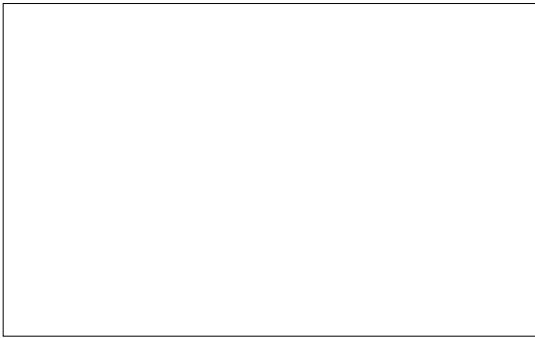


図8

サンゴを経営する大矢竹雄は大矢書店主、斎藤昌三などと縁が深く、昭和九年二月十一日の夕に加山可山・斎藤昌三・前橋半山・田夕梅・宮尾しげを・小澤一蛙などと宴席を同じくして簡便な芳名録に署名している。縦15.2×10.6厘の和綴じのメモ帳らしき一冊である。そして、ここにも上野駅のスタンプが捺されていた(図8右)。加山可山つながりで写真を掲載する。署名(図8左)は右頁二人目が可山、三人目が大矢竹雄の逆字署名、前橋半山、廣瀬木兎、斉

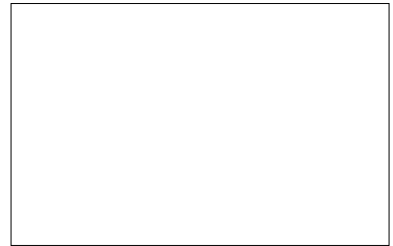


図6

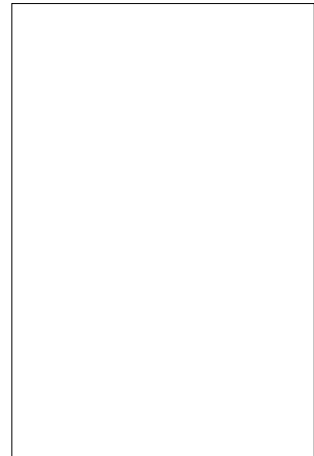


図7

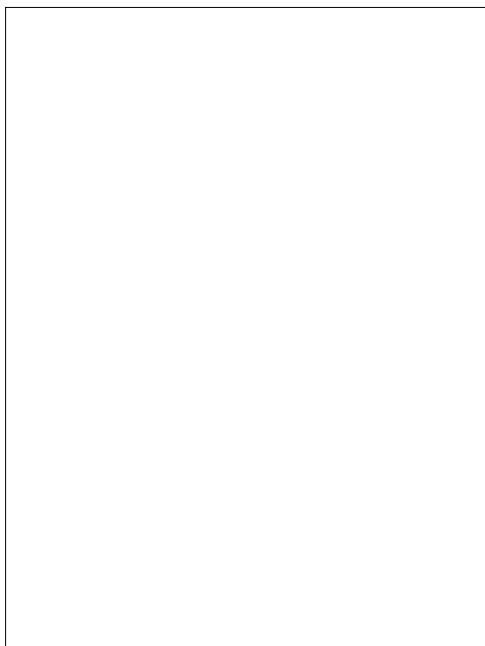


図9

藤昌三と続く。
元に戻って「飛入 木村捨三」の蒐印帖で次に逸することのできない寄せ書きがある。
昭和12年4月17日以後大阪へ寄り小宝亭で小宴を催すが、参加者は、蒐集帖の持ち主の他に小宝、紫翠、百兎庵(下中央)、一步人(中程)、可山であった(図9)。可山は横浜住の加山可山であるので、おそらく加山可山来阪に際して四天王寺公園の小宝亭で歓迎の小宴を開いた際の寄せ書きであろう。可山以外はすべて浪花趣味道楽宗の有力会員で、その会合や来阪歓迎会は道楽宗会員の小宝太田健二郎の経営する小宝亭で行われることも多かった。斎藤昌三の『いもづる』の古い仲間玩愚洞可山、本名加山道之助は、同時に集古会の会員でもあったが、交流する趣味家の範囲は広く、郷土玩具蒐集は明治十年丑歳生まれに

因んで「天神さま」の蒐集で知られ、納札家としても其界の革新に取り組んだひとりであった。少なくともこの一帖の蒐印帖に展開する交流の糸を辿れば、集古会・月曜会・浪花趣味道楽宗・いもづるを結ぶものであり、玩愚洞可山の行動半径は東京・京都・大阪の三都にわたるばかりか、横浜を拠点に海外にも展開していたはずである。加山可山が昭和12年に大阪の小宝亭に居たことを補強する資料は、勿論ない（加山達夫氏『ここに泉あり』『可山句抄』私家版）。

二、我楽他宗神戸別院『盟志はりこみ帖』一冊

—菅藤霞仙・川西健一・川西英—

高橋好劇を中心にした浪花趣味道楽宗の三十三番の札所住職におさまる太田小宝・梅谷紫翠・青山一歩人・村松百鬼庵の四人、そのうちの梅谷紫翠・青山一歩人は、次に紹介する一冊の貼りこみ帖の名簿に名を連ねる。『盟志はりこみ帖』一冊（図10）である。

この貼りこみ帖については、既に川上進氏（ペンネーム南陀楼綾繁）「悲しきコレクター／板祐生

と川西健一・川西英」（『HARD

STUFFE』12号 2003・10）に紹介があり、我楽他宗神戸別院の

メンバー川西健一とその親戚の版画家川西英の初期版画活動との係わ



図10

りについて板祐生も交えた詳細な資料の紹介を行っている。菅藤霞仙についても次のような記述がある。

「一九二九年（昭和四年）九月に「我楽他宗神戸別院珍名刺交歓会」が行なわれ、神戸別院のメンバーを中心に、我楽他宗の面々が提供した自作の名刺の貼込帖が残っている（同種の企画は、大正九年、十年、十一年の三回、いずれも東京で開催されたが、神戸別での開催はこれが初めてで、おそらく最後でもあった）。この貼込帖の表紙裏に三田平凡寺の序文とともに、「盛会御礼」と題する川西健一の挨拶が載っていることから見て、交換会の企画・幹事だったことは間違いない。別院に参加して三年で、並み居るコレクターを取り仕切るまでになったのだ。その得意や、思うべしである。」

「金井さんによれば、菅藤は「お酒の好きな粋人」で、木版年賀状をつくって友人と交換し、蒐集するのが趣味だった。惜しいことに彼が集めた年賀状コレクションは没後に散逸してしまったらしい。

そのような趣味人だったのも道理、菅藤霞仙は我楽他宗の神戸別院に所属するコレクターでもあった。一九三二年（昭和七年）の「我楽他宗人名簿」によれば、菅藤は「第十五番 丹青山悠楽寺」で、「盃・干支に関するもの」を蒐集していた。たしかに川西健一が肝煎り役を務めた一九二九年（昭和四年）九月の「我楽他宗神戸別院珍名刺交歓会」で、菅藤は盃のカタチをした自作の名刺を貼り込んでいる。」

この家蔵『盟志はりこみ帖』には、川上氏の紹介にないガリ版刷りの珍名刺交歓会の案内と名簿が挟まっていたので、紹介しておく。案内は、次のような口上から始まる。

「見様見真似の「珍名刺交歓会」 神戸連を御鞭達ノ下さる意味にて御加入被下度 御願申上げます」

と。「催主」は「兵庫県武庫郡御影町城ノ前一四四〇」「菟楽寺 川西健一」であり、宛名は「三宅吉之助様」である。三宅吉之助は、浪花趣味道楽宗の三十番の札所住職になった人物で大阪の趣味家としてきこえていた。納札家としても一家をなし、その交流関係先に竹久夢二のあることは知られている。肥田皓三氏『上方風雅信』（昭和六十一年十月 人文書院）に「大阪の蔵書票―初期の代表二点について」があり、夢二作の蔵書票が掲載されている。三宅は、名簿にも名を拾い、実際名刺も貼りこんであるので、加入したようである。催主川西健一については、川上進氏の記述によると、

「稲田さんに尋ねてみると、たちまち奥から、いろいろな資料を出してくれた。開館前から、祐生の残した資料をたぐって、全国に散らばっている関係者を探索しただけあって、川西健一のことも「神戸の貿易会社に勤めていたようですね」と教えてくれた。昭和五年十月二日付の手紙の封筒には、「神戸市元町通4丁目137番 サンマス貿易株式会社」と入っている。」

「稲田さん」は祐生出会いの館の稲田セツ子氏である。続けて、「『シブキ』が、同年十二月にもう一冊出ていることも判った。「神戸新名所の巻」で、こっちは四六判で五十ページほどある。神戸の名所を大阪弁で紹介するものだが、名所を描いた色刷りのマッチラベルが貼り込まれている。巻末の「菟楽寺日誌」によれば、「交蒐の蒲原君の神戸名所めぐりの完成」にあわせての配布会で百部を申し込み、その現物を貼り込んだようだ。（『交蒐』は有名な趣味誌だが、蒲原君

が何者かはいまのところ不明）要するに、文章は自分で書き、イラストは他人のふんどしで相撲を取ったワケだ。うまいなあ。表紙には色刷りの題箋が貼られているし、神戸ステーションや生田神社を描いた口絵も数枚入っている。祐生は、この絵を描いただけでなく、「神戸新名所の巻」の印刷・製本まで担当したのである。」

との記述がある。ちなみに「何者か不明」とする「蒲原君」は『交蒐』の編集人「蒲原数人」で「神戸市原田九一」に住した研究趣味誌「交蒐」の中心人物のひとりのようなのである。昭和5年『交蒐』74号所載の顔写真付き暑中見舞いを掲げるほどである。

珍名刺交歓会案内（図12）と名簿（図11）を併せて写真掲載する。

図11

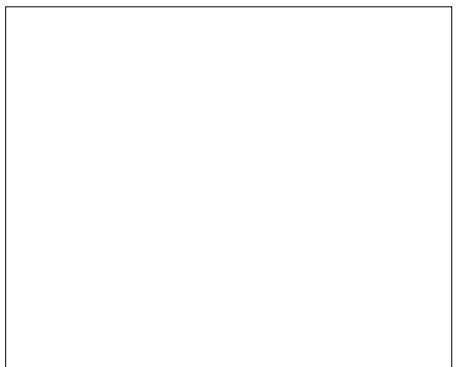
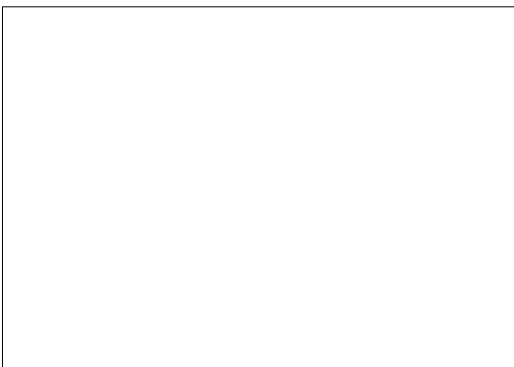


図12



この名簿で注目すべきは、「第十五番丹青山悠楽寺 菅藤霞仙」（図13）と「第廿九番宝袋山菟楽寺 川西建夫」（図14）である。菅藤の住所は「〃」（神戸市）再度筋八〇」、川西の住所は「御影町字城前西四〇」である。

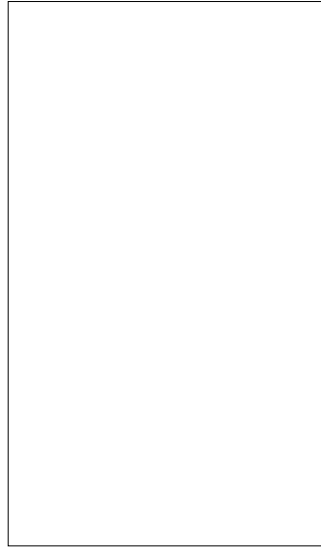


図13

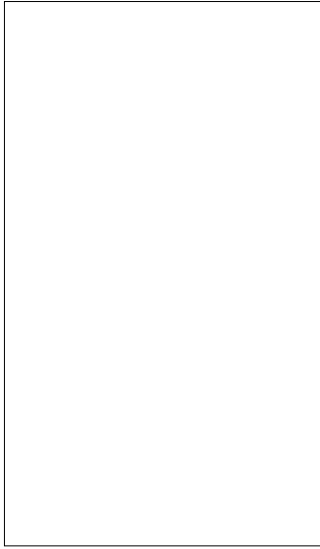
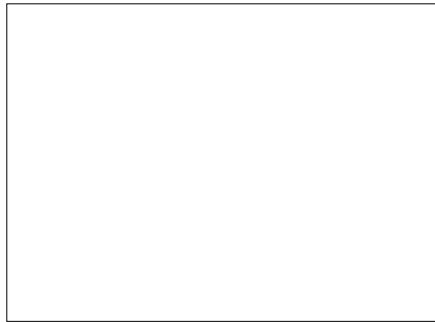
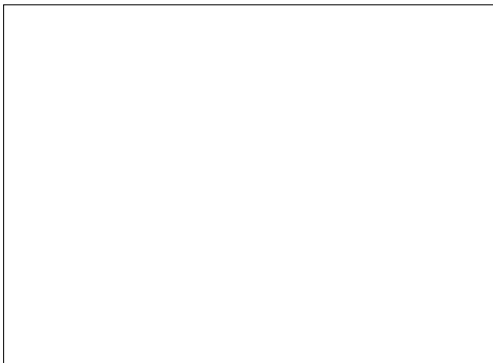


図14

左は菅藤霞仙案の名刺である。



名簿に掲載される「東京」「大阪」「京都」の会員名を掲載しておく。



川西健一（健夫とも）を巡る興味深い事実、即ち川西英の最初の版画集の販売広告のことなどは、神戸市立博物館の金井紀子氏の教示によるとが多いようで、神戸三紅会との係わりの深さや板祐生との交流などは、稲田・金井両氏の詳細な紹介を切に期待するものである。ちなみに川西徳三郎、川西英の兄で俳書蒐集を以ってきこえた川西和露の俳書目録は昭和十三年八月ひむろ社から刊行された。当時、徳三郎は神戸市兵庫区東出町二丁目五九に居住していた。河東碧梧桐が某氏宛てに送った「和露荘文庫」書屋の写真絵葉書を掲出する予定であったが、見つからず、後日に譲る。

三、我楽他宗神戸別院機関紙『絵馬堂』——大野麦風——

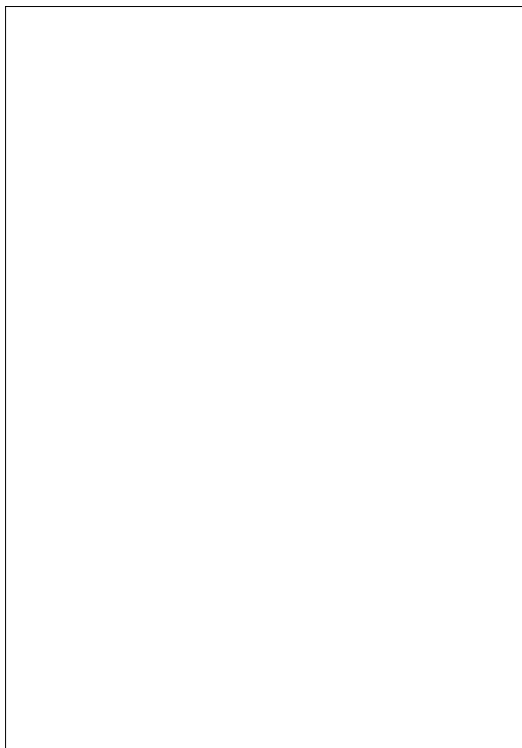
実は我楽他宗神戸別院は、機関紙『絵馬堂』を発刊している。川西健一の活動の拠点のひとつ（個人趣味同人誌『シブキ』が牙城）とも言い得る趣味雑誌で、三田平凡寺自身の積極的な関与はほぼ全面的な支援ともいえるものであった。大正十五年八月の初年初号は「題字松平文嶽／表紙畫 平凡寺」で飾り、浅田澂橋、野崎左文ほかの寄稿（以降の号にも）があり、「故／真木痴囊／淡島寒月 両先生 遺香集（其二）」と題し「遺友平凡寺拝編」と銘打ったものが初年第二号に掲載されている。集古会の会員に重なるものも散見する。「大正15年から昭和2年にかけて発刊された神戸別院発行の雑誌『絵馬堂』は趣味と教養の雑誌としての色合いが濃く、平凡寺自身が積極的に関わるなどこの時期、宗（牧野注・我楽他宗）の活動は「遊び」から「教養」へと重心が移っていったようだ。」（『我楽他宗宗員列伝』 平成19年10月 私家版）と藤野滋氏が指摘している通りである。

『絵馬堂』初年六号には、一頁を割いて宗員の「暑中見舞い」（図15）が掲げられるが、その中央に大きく鎮座するのは「趣味山平凡寺」である。力の入れようは本山の宗報も顔負けである。



右は日本我楽他宗神戸別院 宗誌『絵馬堂』初年初號（大正15年5月15日刊行）表紙絵図案…三田平凡寺

図15 宗員暑中見舞い

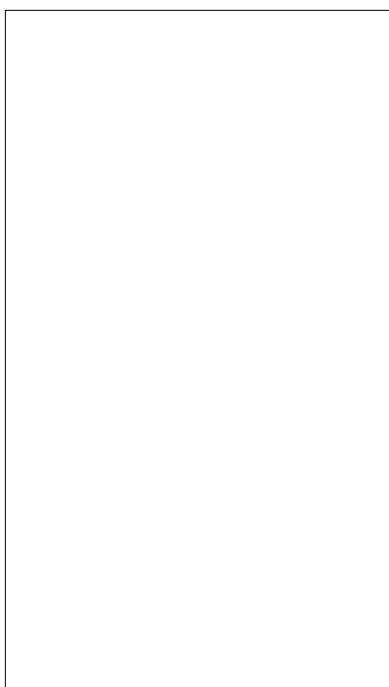


この我楽他宗神戸別院機関紙『絵馬堂』に昭和前期の版画史上に『大日本魚類画集』をもって知られる大野麦風が注目すべき活躍を示していることは、あまり知られていないようである。初年四号に載っている暑中見舞いの左隅下から二段目単枠囲みに「神戸別院四十四番札所／未定／大野麦風／」とあるが、二年新年号（昭和2年1月）では八番麦風山萍漣寺の山号と寺号をえている。大正15年の初年は、三十三所が埋まらないまま、暑中見舞いを出したようであるが、まもなく麦風山萍漣寺と号し八番札所に決まったことが知られる。川西健一は既に菟楽寺の寺号を持つが、初年号では何番か不詳のようで、菅藤は未だ宗員ではなかったと思われる。

従来の大野麦風展の図録に収載された麦風年譜の大正15年から昭和

2年にかけては、大正14年西宮転居、昭和2年神戸三越での個展、翌3年の大阪三越での南洋写生画等の展観、さらに昭和4年再び神戸三越での近作絵画展の開催などを拾うのみである。

『絵馬堂』初年六号には、「摩耶の観月会」として次のような文章が載っている。「我楽他宗の観月会は摩耶山の絵馬洞で左のプログラムで三日間を心行くまで月に吟じ月に親して興趣を恣にした。」その三日目、「二十二日第三日の十六夜はお札博士スタール氏歓迎会日であったが先約の九州の差し繰り出来ない為に十月中旬の帰りにと延期された、待ち呆気となった宗員は各自山寺號入の弓張提灯を掲げて絵馬洞に参集して」という次第顛末を記し、果園（これはあの果園？）の発句以下続くのであるが、大野萍漣寺も「街の灯を見下す摩耶の月夜哉」の句を寄せている。三日間の盛会に大野麦風も参加し、「ビールサイダーの奉納のお下りに車座を作」った中に麦風も居たようである。



俳句に関して若干加えるならば、『絵馬堂』昭和二年二月発行の二年二号の「絵馬俳壇」の「同人之吟」にも萍漣山麦風の号で次の二句

を掲載している。

「梅咲くや比良は何時迄雪のある
 其中に丸鬚目立つカルタ哉」

続いて「甲陽 大野麦風撰」として二十句撰の撰句欄を担当している。また、同号には、「町名改正披露俳句集」の「余興十評通句賞品」として「二等 甲陽大野麦風画伯尺三絹本巻」ともある。ちなみに前号の『絵馬堂』昭和二年一月発行の二年一号では「町名改正披露俳句集」の「余興十評通句賞品」として「三等 神戸 大野麦風画伯尺二絹本」とある。二年六号の「絵馬俳壇」には、「大野 萍漣寺」で「墨客の尻長く若葉風そよく／夏の川子供等によって濁しけり」の二句。宗員・顧問として別院における俳壇や俳句の方面にも積極的に参加していたことは重要であろう。

『絵馬堂』初年六号には、巻末広告欄に、摩耶鋼索鐵道株式会社の一頁ご案内、大阪白木屋の一頁広告に挟まれた一頁に、澤田合名会社の輸入品広告を上段に、下段に「麦風会」の入会勧誘案内を載せていることも付け加えておく(図16)。日本画家や版画家の「生計」を支える支援(後援)者の組織化の「生成」を目的の当たりにする思いがあるものである。

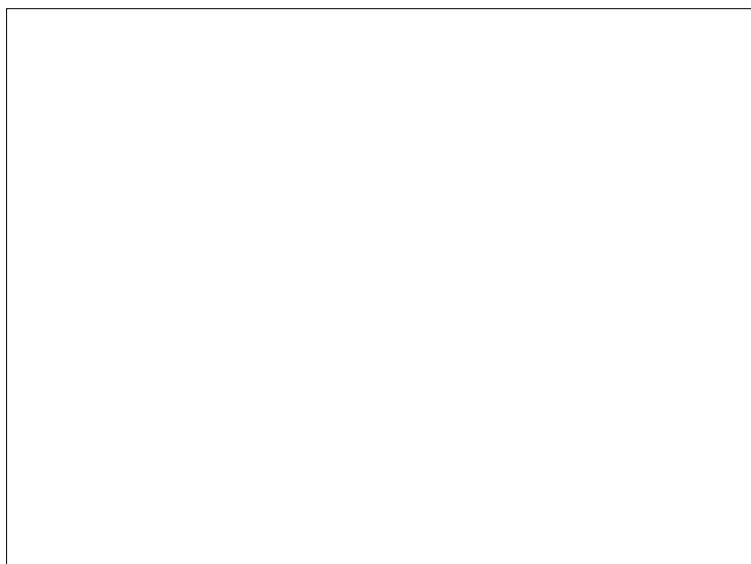
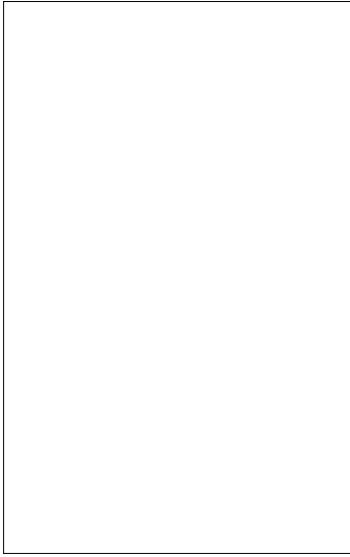


図16

大正十五年十一月発行の初年七号には、巻頭扉に二葉の写真に掲載する。図17上段一葉「スタール博士参堂歓迎」と題した一点を転載するが、前列中央がフレデリック・スターで、前列左端洋装の人物が大野麦風である。待ちに待ったスター博士歓迎の一コマである。

図17

同号所収の大野麦風のスケッチである。



また、同号の一角を見ると「絵馬堂顧問」の大野麦風画伯「半切一葉」が「新年用掛軸」として「金拾五円也」（図18）という価格で「絵馬堂誌友」限定で頒布される、という正月用誌友特別企画が用意されている。申込所は「神戸市野崎通二丁目三五」の絵馬堂刊行所である。表装も宗員の元木春陽堂が特別を以て「仕立申受く」と小字で記すものである。

図18

『絵馬堂』初年四号には、「絵馬俳壇」（図19）第五回募集の選者となり、「多能趣味たより」（図20）には麦風の団扇・扇の展覧会の盛況ぶりが紹介されている。

図19

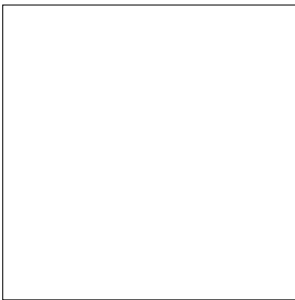
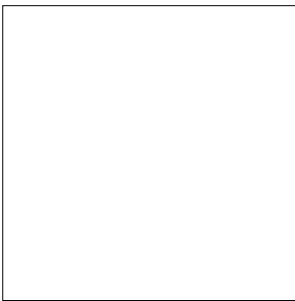


図20



『絵馬堂』は、大正十六年に当たる昭和二年で第二年に入る。その一号の表紙は左のような図(図21)に替わる。大野麦風の絵馬も左下に配されたので、拡大図(図22上)を示す。「萍漣児」が萍漣寺大野麦風である。絵馬には「麦風」の署名もある。

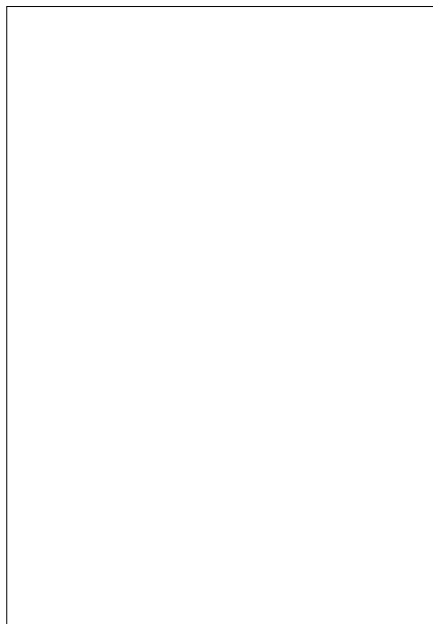


図21

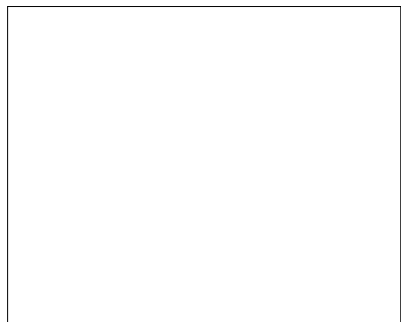


図22



『絵馬堂』昭和二年の一号は扉に「謹奉悼／聖上御崩御」とし、右下に活字ポイントをおとして「日本我楽他宗／東京／神戸／大連／絵馬堂」と列記する。その十六頁に写真入り(図22下)で挨拶代わりの山寺号と住所「神戸市外武庫郡大社村／廣田神社前」が添えられる。同号に川西健一も同体裁で写真(図23)入りのものを掲載する。

『絵馬堂』昭和二年一月発行の二年一号には、前年末の十一月二十六日に我楽他宗と麦風会共催の観楓会が奈良で行われたようでの記録「奈良の観楓」が収められる。大野麦風も絵筆を執って「次から次へと描く」様が記録されている(図24)。

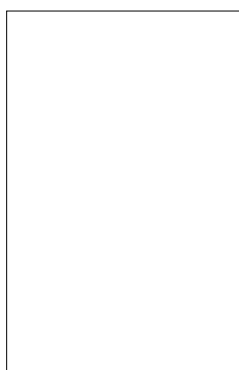


図23

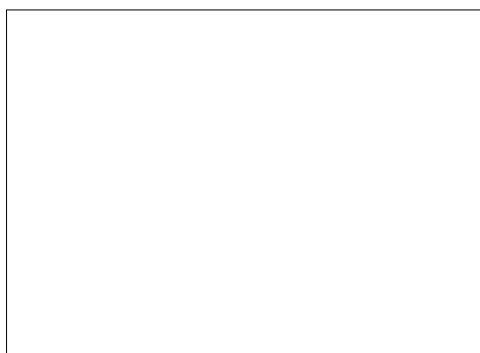


図24

『絵馬堂』昭和二年三月発刊の二年三月号には、「趣味と神戸人」と題した川西菟楽寺（健一）の文章が載っている。「我楽他宗神戸の別院には趣味の指導者として一番の藤川萬球寺氏が居り、書道の指導者として十六番の末吉養心寺氏があり、画の指導者に萍漣寺大野麦風氏、」などの諸氏を挙げ、入宗した経緯を次のように記す。「大正十五年十二月三日の夜だ、萬球寺さんや愛菊寺さんにすすめられて惜年会に列席した、御熱心な宗員の方々が次から次へと出席された、そして相互に隔のない応接振りがうれしく私の眼に映った、……丁度その時番所に空番があるといふので入宗を願ってお仲間入りをした、……兼て私は「お伽づくし」壹百種を燐票型に完成したその記念のための小集会を昨年の年末に催した、この会を開くに当って趣向を考へて見た結果、会の進行をお伽嘶にかこつけてしてみた、家族の者も面白がって手伝ってくれた、」など、例の川西英との因縁のある「お伽づくし」壹百種燐票のことが出てくるのは興味深い。前節で引用した川上進氏「悲しきコレクター」の以下の記述に符合する。「『お伽づくし』は、その後増補され、大正十五年十二月に『川西右島氏画 お伽づくし票壹百種』貼込帖として、板祐生に贈られた。」とあり、さらに「一九二五年（大正十四年）四月発行の『シブキ』復刊第一号「お伽づくしの巻」を見ていたら、広告が載っていた。」として広告を紹介しているが、その広告は『川西英雄木版画』七枚巻組のもので、文章には「川西英雄氏 お伽づくしの図様を案出されつつある人です。神戸で青年画家として活躍しています。」とあるのだ、という。川西右島氏が川西英雄氏で、即ち川西英であり、図案は川西英の手になるもの、ということになる。「『シブキ』が、同年十二月にもう一冊出ていること

も判った。「神戸新名所の巻」で、こっちは四六判で五十ページほどある。神戸の名所を大阪弁で紹介するものだが、名所を描いた色刷りのマッチラベルが貼り込まれている。巻末の「菟楽寺日誌」によれば、「交蒐の蒲原君の神戸名所めぐりの完成」にあわせての配布会で百部を申し込み、その現物を貼り込んだようだ。」とある。後のものでもあろうが、郵便趣味雑誌『交蒐』昭和五年七月一日発行の七十三号には「◇神戸百景めぐり 一百種／二百枚 一組金四十銭」の広告がある。

『絵馬堂』二年三月号に戻ると、巻末近く「御知らせ」として、大野麦風の動静が記されている。「▲大野麦風画伯は三月下旬朝鮮行の作品に忙殺されて居る、同画伯の揮毫御希望は絵馬堂刊行所へ申込まれたし、本誌々友に限り尺五絹本五拾円、尺二絹本参拾五円、尺絹本式拾五円にて御希望に応じます」と。こうした頒布のシステムは麦風のような画家にとってなくてはならぬものであった。

『絵馬堂』昭和二年四月発刊の二年四号には、巻頭に集合写真を掲げる。題して「我楽他宗三月例会川西菟楽寺本堂記念撮影」（図25）として、上段右から三人目が、おそらく大野麦風であろうか。川西健一は、前列中央、男の子の上で大口をあけて笑う人物か、と推定される。

図
25

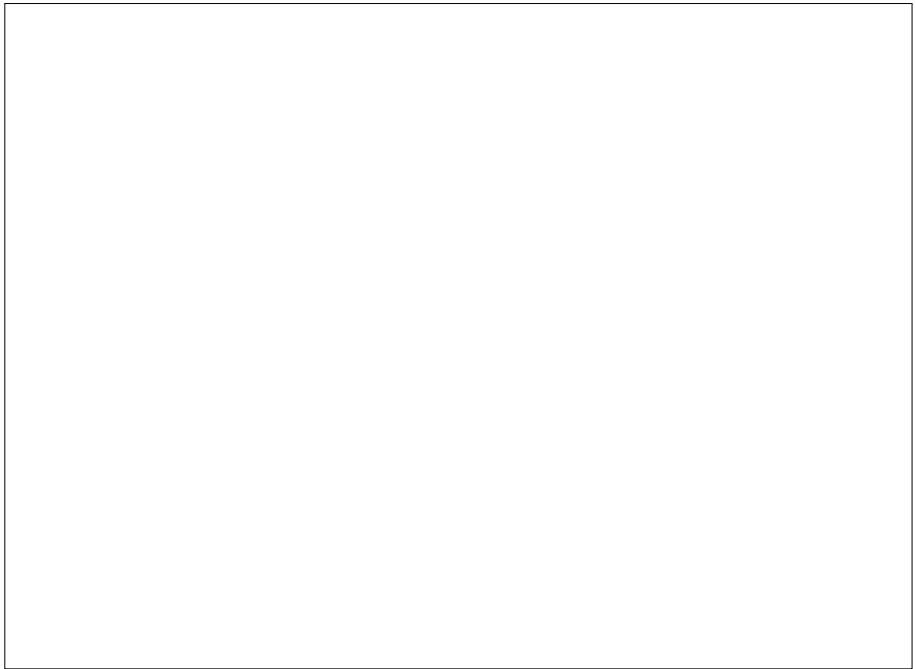
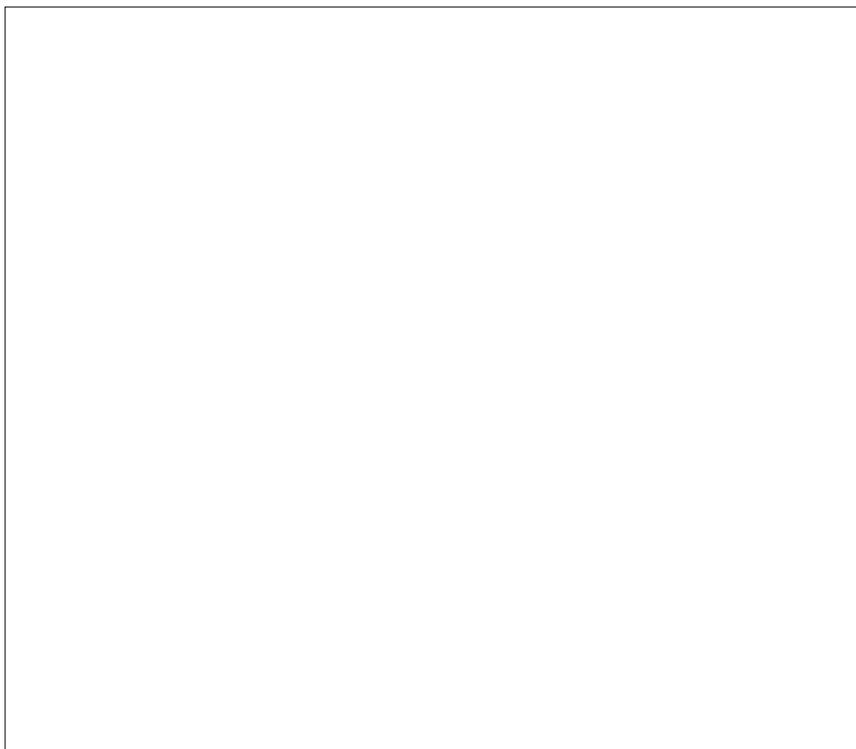


図
26



『絵馬堂』二年五号の三十八頁に次のような記事(図26)が掲載された。

ここに翻字すると、

「大野麦風同好會趣旨

大野麦風君は、美をもとめて休む間もなき若い巡禮者であります、煩瑣と虚飾と矛盾とに充てる現代の都市生活に、自分のもとむるものに逢着し得なかつた麦風君は、この度深く心に決する所あり、八重の潮路を越へ遠く南洋の彼方サイパン、ヤップ、パラウの島々に、美の恒久の姿を尋ねやうとして旅立せられる事となりました、近代画壇の異材ゴオガンがタヒチの島に来て、初てあらゆる伝統と因襲とを離れて、真理と自然とに近づいて来たやうに、熱海の只中に浮てゐる珊瑚礁の無幻の國、太古その儘の野蛮と神秘の島、そこに見られる原始的な生活と禽獸魚介の珍らしきとは、必ずや麦風君の感興を刺激し、昂揚して、當代画壇に異彩を放つ幾多会心の制作をもたらす事が出来るだろうと信じます。この目的のもとに今度の画會は企られました、大方諸君子の御後援を得て、この美の巡禮者の計画が実現出来ましたなら幸福だと存じます。

麦風君の略歴

白馬會太平洋画會に学び純日本画系統皆無の異色ある作家であります、東都に小壮研究團體たる華滿樹社を創立、其他個展を主として作品発表、文展には「白き船」「山の温泉」帝展には「桑摘」「朗かなる日」等の制作があります、兵庫縣美術協會委員、現住所阪急甲陽山麓の画室にて研究

薄田泣菫識

大阪市東区北渡辺町（電車北入西側）

事務所 呑平画房内

大阪市東区平野町四丁目

申込所 眞賀根美術店

發起及賛□人は

関大阪市長始め井上徳太郎氏外数十名

清規

尺三絹本 三拾五圓 六曲一雙 五百圓

尺五絹本 五拾圓 二曲一雙 三百圓

尺八絹本 七拾圓 二曲半雙 百五拾圓

作品は大阪白木屋呉服店楼上にて展覽會を来る七月上旬開催の上頒布す

御希望の方は絵馬堂へ申込れば取次します

發起人に「関大阪市長始め井上徳太郎氏外数十名」ということになると、大阪府が計画していた極東大博覽會を想起することになる。それは大阪毎日新聞1926. 7. 4（大正15 神戸大学図書館のホームページ参看）によると大阪府が大正十八年（昭和四年に当たる）三月から七ヶ月間にわたって大阪市で開催を予定していた極東大博覽會（平和十周年記念日本大博覽會）で、会長中川望、副会長を大阪市長関一と大阪商業會議所会頭稲畑勝郎の両名が担い、大阪税関長井上徳太郎が委員として協力者に名を連ねていた。留意すべきは「招請国」で「国と経済上最も緊密な関係を持つアジア、東アフリカ、濠洲、南洋方面の出品を第一とし欧米方面の参考出品を勧奨し実質を万国博覽

会とする」点である。こうしたプランに係わるものかどうかは今後の課題であるが、少なくとも、推薦文を西宮の名士薄田泣菫が記し発起人に大阪市長関一がいることは看過しえない（既に『大日本魚類画集』〈西宮書院刊 一九三七年〉推薦者の顔ぶれが想定できそうである）。神戸我楽他宗員中心の麦風会から支援者層の拡大が西宮・大阪の連携で行われていたことも知られるのである（会員制）。

ついでに手持ちの資料を挙げるならば、昭和十二年丁丑年賀絵葉書交換会会員名簿（中山香橋旧蔵）には、「小塚省治・菅藤霞仙・須知善一」などの名が拾え、昭和十四年第一回吾八主催年賀絵葉書交換会（吉田栄一旧蔵 図27）では、「菅藤霞仙・須知善一・宮尾しげを・山内神斧」の名を確認できるくらいである。

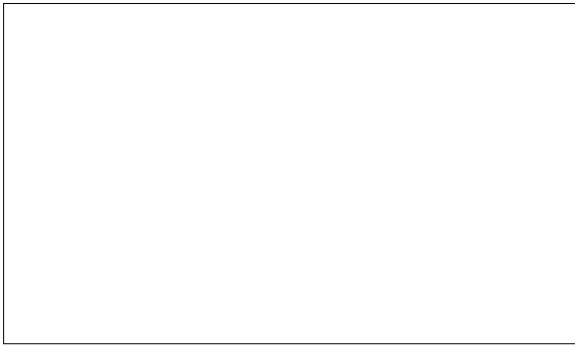


図27

むすび

最後に昭和三年（平和記念の年）という年と係わる一点の資料を掲げて資料集としての本稿を終えたい。

先に登場した川西健一が「図案家川西英」を巻き込んで個人趣味誌『シブキ』に「お伽づくし」を刊行したのが大正十五年（昭和元年）、「交菟の蒲原君の神戸名所めぐりの完成」にあわせて「神戸新名所の巻」を配布したのが昭和二年十二月である。この「交菟の蒲原君」は『交菟』誌の編集発行責任者蒲原抱水（「敷人」は本名か）で、この『交菟』七十三号（昭和五年七月発行）に拠れば、昭和三年のスタンプ熱は遠く南洋群島に及び始政十年記念スタンプを使用するに至る点について、次のような文章を載せている。「谷梅丘」署名人の「スタンプ綺語」（其二十八）に「前號に記念スタンプを以て「扶桑八景」を作ったが、更にこれを新領土に求めて茲に「新八景」を選ぶ、見よ！如何に風景の斬新にして雄大なるかを!!」として日本新八景を選び、「沃野（南洋群島始政七年）」（図28）を掲出するのである。



図28

同号には、巻頭「趣味暦」欄に「柴田春郊」署名入の文章があり、「平和記念日」と併せて「南洋群島始政記念日」の項目が設けられて、左の如きスタンプ（図29）が載せられて、「南洋群島に於いては大正十四年七月一日始政七年記念として始めて特殊印を使用し、昭和三年其の十年に際し再び使用した。起算の日は大正八年の平和記念日に置いてあるが、寧ろ大正十一年南洋庁設置の時を以て妥当とすべきか、尚ほ研究を要するものがある。」と結ぶ。川西健一周辺の南洋群島に對する関心の昂揚を、スタンプ熱を通して知ることができる。麦風もまた然りで、大阪市長関一もまた「南洋方面の出品を第一」と考えて不思議はない状況にあった。

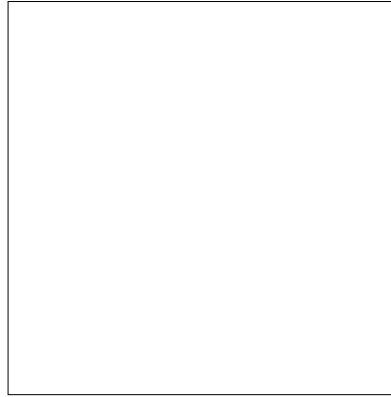


図29

序に一言、極東大博覧会（平和十周年記念日本大博覧会）の計画が大正十八年（昭和四年に当たる）三月から七ヶ月間となると、展示には南洋からの出品もスケールの大きなものが期待されるであろう。昭和三年のスタンプに見るようなパラオの民家まるごと移築などは格好な出陳物ではなからうか。大野麦風の移築したパラオ民家のことが話題になるが、民家移築は麦風のパラオ熱に帰結されているようである。結果的にどうなったかは問わないとして、どこかに、平和十年の博覧会の影が見え隠れするのだが、いかがなものであろうか。改めて推薦文に西宮の薄田泣菫識とあり発起人に大阪市長関一がいることが思い起こされるのである。

* * *

本稿は平成二十六年十二月二十七日開催第二回国際シンポジウム「東アジアにおける大衆的図像の視覚文化論」（於同志社大学今出川校地良心館305室）における発表「研究史の交点について―庭つづきの〈学問領域〉―」の内容の一部に基くものである。

また、今回も平成二十七年科学研究費（挑戦的萌芽研究・課題番号24652049）の助成に拠る研究成果であることを附記する。